

55 国立科学博物館所蔵の『遠西医範』の一写本について

西嶋佑太郎

京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程

宇田川榛斎による解剖学書『医範提綱』(1805年)は、『遠西医範』の内容を簡略化したものと言われている。この『遠西医範』の諸本については、東京大学の鶯軒文庫、東北大学の狩野文庫、天理図書館のものなどがあるが、中山沃氏は1988年の「遠西医範と西説医範の比較研究」で、これに岡山大学所蔵の『西説医範』を加え、比較検討を行った。今回、国立科学博物館に所蔵される「海上随鷗解剖記録及び解剖下図」(資産番号10000001193)のなかに、これまで報告されていない『遠西医範』写本(以下、当該資料という)があったため、概要を報告する。

国立科学博物館に所蔵される「海上随鷗解剖記録及び解剖下図」は、解剖記録や解剖図稿を含む一連の資料群である。その大半は宗田一氏旧蔵で、宗田一氏の1961年の論考「海上随鷗の解剖」に紹介されるものであるが、当該資料については言及がなく、詳細な来歴は不詳である。

当該資料は、写本1冊で37丁あり、表紙に「頭腔脳脈篇」(脈は「神経」を表す海上随鷗の造字)「葛岡活堂書」とある。巻首には「頭腔篇脈部下」とある。本文は有辺有界10行25字程度で、漢字カナ交じり文で書かれる。上欄に「病機」などの見出しのほか、下に述べる注記が見られる。

葛岡活堂は、海上随鷗の社盟録に見える、文化二年に入門した葛岡栄治を指すと考えられる。資料群のなかの『新撰解観左券』(宗田氏曰く「解剖図作製のための計画書」)にも「活堂痴人」の名が見え、これも宗田氏は葛岡活堂としている。

内容は、脳神経系についての概説で、脳神経、脊髄神経、神経液、脳の機能等が扱われる。岡山大学『西説医範』「頭腔脈部」と東京大学鶯軒文庫『遠西医範』「脳篇」も同じ内容であるが、このうち岡山大学所蔵のものとは、海上随鷗の造字が使われている点が共通する。岡山大学所蔵のものと当該資料とを詳細に比較すると、異体字のゆれや書き誤りが共通の箇所でおこることがある一方、それぞれ別の箇所脱漏が見られることから、共通の祖本からそれぞれの写本が派生したものと考えられた。また当該資料には、上欄や割注の形で岡山大学所蔵のものにはない注記がみられた。このうち「武子云」から始まる注記は、ブランカールの解剖学書の引用と思われる。脊髄の動静脈の項目の上欄には、内外頸静脈について「此処ニ」「論載スベシ」という記載が見られた。他に「野猪」で解剖所見を確認したことを述べた「鷗云」から始まる注記もあることから、この写本の祖本は、造字を使って『遠西医範』の用語を海上随鷗の用語に「翻訳」したうえで、海上随鷗自身の注記を加えたものである可能性がある。

この注記と海上随鷗との関係を補強するものとして、海上随鷗の解剖学書『八譜』の一写本、法政大学所蔵『八八譜』(板澤蘭学資料400番)のうち、脳神経に関する本文を参照した。すると一部の上欄の注記と一致するものが見られた。『遠西医範』よりも『八譜』のほうが後に成立したと思われることから、『遠西医範』の欄外注記を『八譜』本文に取り入れたというほうが考えやすい。また、両者はともにブランカールをはじめとした西洋解剖学書の引用を多く用いることから、海上随鷗は『八譜』作成にあたって『遠西医範』を参考にしていただろう可能性があると思われる。しかし、『遠西医範』と『八譜』との関係を述べるためには、『八譜』自体の検討を要する。残る国立科学博物館の資料群および『八譜』諸本の検討を今後行う予定である。